

オープンスペースからみた近世「水戸」城下町の 空間構造とその明治期における変容要因について

田畑貞寿・木下 剛
(都市環境デザイン学研究室)

Urban Space Structure Based on Open Space, in Castle Town "Mito" of the Edo era and its Changing Factors in the Meiji era

Sadatoshi TABATA, Takeshi KINOSHITA
(Laboratory of Urban Landscape Design)

ABSTRACT

Castle town "Mito" in the Edo era consisted of basic open space system. These open spaces had multiple function; urban frame, urban defense and transportation of goods, and there were ones which was of utility for public recreations among these open spaces. But, since the Meiji era, its open space system of the Edo era has been destroyed through modern urban developments; infrastructure improvements and developments of public institutions and town area, etc.

Therefore, these open spaces' role that forms castle town in the Edo era had changed certainly, and these open spaces became mere space for construction of modern facilities. On the other hand, in the Meiji era, though the public open spaces like "urban park" were invented through reusing the existing open spaces, these open spaces that formed basic urban structure in the Edo era had been become lost.

1. 研究の目的及び方法

わが国の近代都市は近世城下町を母体として発展を遂げたものが多い。そして近世城下町が自然地形を巧みに利用し、水系・斜面地等の天然のオープンスペースと堀等の人工のオープンスペースとをシステムティックに組み合わせることによって都市を成立させていたことはよく指摘されるところである。しかし、近世のオープンスペース構造が近代化の過程でどのように解体・再編成されその社会的な存在意味を変化させてきたのかに関する実証的な研究は従来あまりみられなかった。

そこで、ここでは「水戸」を事例として、近世城下町の基幹的な空間構造を形成するオープンスペースと比較的公共的・半公共的利用の対象となるオープンスペースに注目し、主に以下の2項目についてその内容を調べ、幕末～明治期におけるオープンスペースの社会的な存在意味について考察することを本論の目的とする。

- (イ) 近世のオープンスペース分布とその社会的な存在意味

- (ロ) 幕末から明治期にかけてのオープンスペース分布構造の変容とその変容要因

なお、水戸を取り上げたのは、天然の地理条件を巧みに応用した近世城郭の典型的な立地例であること、近世において体系的なオープンスペース構造を有していたこと、また近代化の過程で都市化・市街化の進行が激しく歴史的な空間構造の変容が大きかった都市のひとつであること等の理由によるものであり、本論の目的を達成する上で最適の事例であると考えたからである。

近世水戸のオープンスペース分布については、厳密な規模や形態、位置関係等を把握することは困難である。ここでは「水戸地図 (1830・天保元年)」, 「安政中水戸上町図」, 「安政中水戸下町図」等の幕末期の古絵図を中心に、正保時代の「水戸城図」, 文化時代の「水戸古図」, 「寛文城下町図」, 「元禄時代水戸城地図」といった古絵図の情報を、昭和9年(1934)の「水戸市平面図」(縮尺1/8,000)上にトレースすることで、幕末期におけるオープンスペースの分布状況を求めた。これについてはむしろ厳密とはいえないが、本研究においては、オー

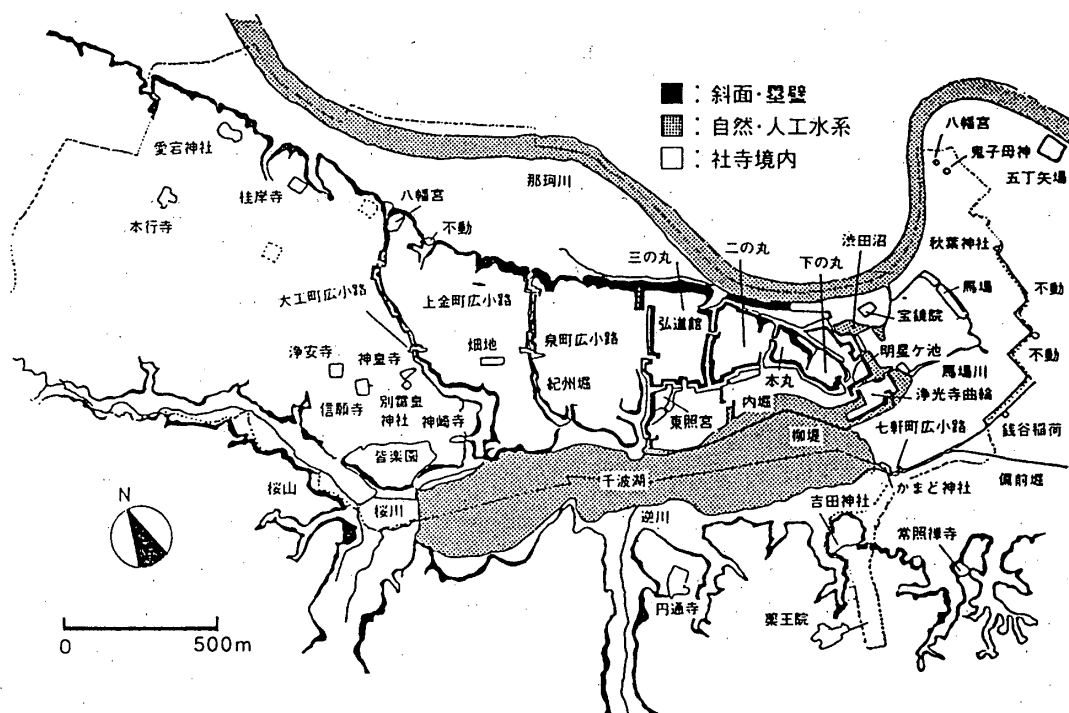
オープンスペースの大まかな分布状況とその構造を把握できれば、目的は十分達成されると思われる。昭和9年の「水戸市平面図」を使用したのは、現在入手し得る限りで最も古く正確な地図のうちのひとつであり¹⁾、近世の空間情報を豊富にのこしているため、オープンスペース分布の把握が比較的安易だからである。そしてさらに文献・資料等からオープンスペースの社会的な存在意味を明らかにし、近世におけるオープンスペースの概念規定とその分類について考察を加えた。

オープンスペース構造の変容については、「水戸市上下市街略図（明治7年・1874）」、「水戸市街改正略図

（1890・明治23年）」、「水戸市現勢地図（明治42年・1909、縮尺約1/10,000）」等の明治期における地図類と上記のオープンスペース分布図とを比較することによって、その形態変容を追跡した。同時に文献・資料等からその変容要因を明らかにし、オープンスペース分布とその構造のもつ社会的な存在意味の変化について考察を試みた。

2. オープンスペースからみた近世「水戸」城下町の空間構造

(1) 近世「水戸」のオープンスペース



第1図 幕末期（天保～安政頃）のオープンスペース分布

上記の幕末期の古絵図には、那珂川、千波湖といった自然水系をはじめとして、堀（水濠・空濠）や埜壁、農耕地、社寺境内、広小路、芝地、農耕地といったオープンスペースが描かれている。そしてこれらオープンスペースの位置と形態を昭和9年の「水戸市平面図」上に推定して作成したものが第1図「幕末期（天保～安政頃）のオープンスペース分布」である。この際、主に両図の街路形状を照らし合わせることで、オープンスペースの位置と形態を推定した。以下、第1図を見ながら、それぞれのオープンスペースについて文献の記述により、その社会的な存在意味について概観してみる。

まず、那珂川¹²⁾については、城下に面する部分だけでも数カ所の河岸が設けられており、下流の那珂湊と城下商人とを結んで大変賑わっていたが^{3) 4)}、城下諸街道の

渡船については軍事上厳重な警備がなされたようである⁵⁾。千波湖は柳堤以北が内堀とされていたうえに、勝手に船を浮かべたり夜間の航行等が禁じられていたこと、魚介類の捕獲が禁止されていたこと、あるいは、新田開発のための埋立計画が重臣達の強い反対にあって頓挫したといったこと等が文献²⁾に明らかである。また上・下町の連絡の便をはかるために千波湖に設けられた「柳堤」¹³⁾については、元禄3年（1690）、緑陰をつくるため徳川光圀によって道路両側に柳で植栽されたことに由来するものである。宝暦年間にはさらに楓数種が植栽され、通行人に美観と憩いの場を提供していた⁶⁾。後に「水戸八景」¹⁴⁾にも指定されている。また徳川光圀の築造によるものであることから柳堤が中国西湖の蘇堤を模してつくられたであろうことは想像に難しくなく、通行の便をは

かるという機能的な役割を果たすと同時に、美的感覚に基づく修景の役割をも果たしていたことが推察される。以上のことから、邦珂川や千波湖は自然水系ではあるものの、同時に要害としての軍事的機能や城下経営のための運輸・交通ルートとしての機能を兼ね備えていたことがわかる。特に千波湖・柳堤については「柳堤を加えた千波湖の眺めは美しく、当時士民の遊楽の地となり、水戸八景の一名所とされた」⁷⁾といった記述や、四季の変化がありそこに憩う者も多かった⁷⁾といったことに明らかのように、人々に親しまれる風光の地として名所的にも機能していたであろうことが考えられる。

堀・塁壁については、本丸、二の丸、三の丸といった城郭の核の部分西側と、東側の外堀として機能すべく既存の桜川¹⁵⁾の河道を付け替えた馬場川と灌漑のためにつくられた備前堀¹⁶⁾を除いては、基本的に千波湖に流入する小河川の浸蝕谷と那珂川とその支流である桜川の自然の浸蝕崖を利用し、不足部分を人工的に補うというかたちをとっており、自然地形・水系を巧みに応用した近世城郭の好立地例をみることができる。なお、水戸城の塁壁は石垣が用いられず土塁によっていたが、明治時代の写真によればそこは地被植物の類で覆われ緑豊かな空間となっていたことがわかる。

社寺境内、特に寺院については、寛文・元禄の頃、光圀によって勢力削減のために破却処分となったものも多いが、後に正しい仏教復興のための寺院整理を実施し併せて新寺の建立や由緒ある寺院の保護もおこなわれている³⁵⁾。神社については、神仏習合を排し純正な神社崇敬の復興がすすめられたが、寛文6年(1666)一村一社制が実施され、神社を村落生活の中心に据え村民の共同体的精神と神社崇敬の思想を育てたといわれる³⁶⁾。特に東照宮²³⁾と吉田神社²⁴⁾では水戸城下最大といわれる祭礼が催され相当な賑わいを見せていたようであり、士族をはじめとする人々の信仰の厚さを示している。また吉田神社の祭礼の際には千波湖対岸の船宿から湖上を遊覧しながら神社にアプローチすることもあったらしく²⁾、当時の神社とそこで催される祭礼とが極めて儀式性の高い非日常的レクリエーションのための場を提供していたことが推察される。

広小路については、各時代の古絵図において泉町と大工町、上金町、七軒町等の4ヶ所が確認できる。泉町、上金町の広小路では明暦以後毎月穀市が開かれ、大工町では各種商店が軒を並べて賑わいをもっていた⁸⁾。また、七軒町広小路は高札が張り出される制札場であり、毎月古着市や織物市が開かれ、専売権が与えられていた商人の活気に満ちあふれていたようであり⁸⁾、封建時代の広小路が、都市広場的な性格を有しており、防災的な役割のほかにも経済活動の中心地やコミュニケーションの場

としても機能していたことがわかる。

芝地については、天保元年の「水戸地図」上の二の丸南側および下の丸と浄光寺曲輪の東側の城内への門前付近にかなりの規模と整形的な形態をもって描かれている。また、文献³⁹⁾によれば、この芝地を武者溜とよび、武士をここに集めて城中から閲兵したといった内容が確認できる。このことから、これら芝地は封建君主の権威を象徴すべく城の修景的な役割を果たしていたであろうと同時に武者溜という実用的な機能をも兼ね備えていたことが考えられよう。

農耕地については、天保元年の「水戸地図」に城下町周縁部のほかに、武家地と町人地に囲まれるかたちで街区(新鳥見町)の中心部に畑地が描かれている。所有構造が明らかでないが、街区の中心部に位置するという立地形態から考えて、ある程度の公共性とコミュニケーションの場としての性格を有していたであろうことが推察される。また武家屋敷の敷地内にも菜園が設けられていた。³⁷⁾

最後に、幕末期水戸において、「偕楽園」¹⁷⁾の存在を忘れることはできない。「皆とともに楽しむ」という主旨に基づき開設されたが、実際には一般庶民の入園は許可されず、士族とその家族にのみ解放されたようである。しかしこのことは、氏族に限定されていたとはいえ、共同で利用する施設を為政者自らが提供するという当時としては比較的珍しい発想があったことを示す出来事であろう。

(2) 近世「水戸」のオープンスペース分布

以上述べてきた近世水戸にみられたオープンスペースの社会的性格と、第1図に示されている形態とを照らし合わせてみると、これらオープンスペースは次の5タイプに大きく分類されるであろう。

- ①水系、堀や塁壁に代表される近世城下町の骨格を形成し都市景観・都市イメージの大きな構成要素となっていたオープンスペース
- ②共同体意識の統合の座として民衆の精神的よりどころとなっていたオープンスペース
- ③広小路とよばれ経済活動の振興や都市防災を目的とし都市広場的な性格をもつオープンスペース
- ④水田や畑等の生産緑地
- ⑤「水戸城」、「偕楽園」、「徳川家花園」等の封建士族の特権的空間ではあるが都市のランドマークや名所として機能するいわゆる“Parc”³⁴⁾的性格を持つオープンスペース

第1図をみると明らかなように、近世「水戸」城下町は①のようなオープンスペースの骨格的な構造を有しており、しかもそのオープンスペース構造が人工的なもの

ではなく天然の水系や地形を巧みに利用したものであり、足りない部分を人工的な堀・土累（水戸城の本丸、二の丸、三の丸、下の丸周辺の堀および泉町広小路以北の紀州堀、大工町広小路以北の堀等）で補っている。そしてその上で武家地や町人地の配置といったゾーニングの問題が考慮されているというところに近世城下町建設の特徴がみられる。このように、近世城下町の建設に当っては、①のようなオープンスペースのシステム化がなされており、これは形態的に見る限り現代の都市計画における緑地系統に類似するものであるが、機能的にはあくまで軍事的な目的を全うするものであったといえよう。

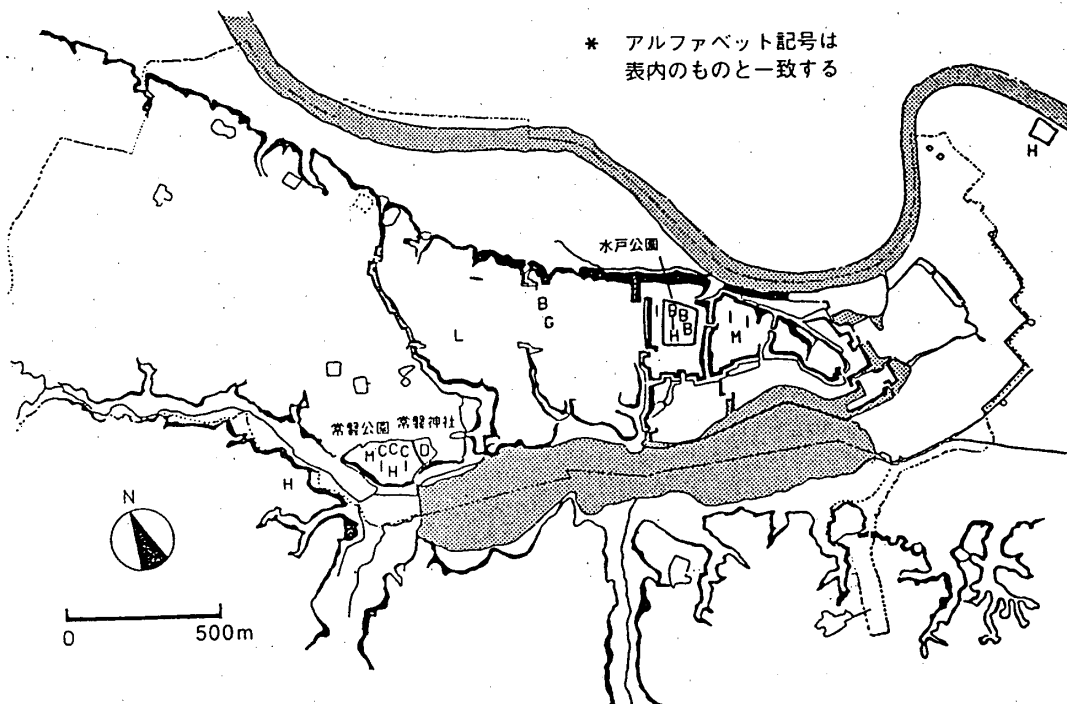
そして②は城下町外縁部に位置し、①によるオープンスペース・システムとはほぼ接触していることが読み取れる。近世城下町における寺院が城下町周縁部に位置する傾向にあるのは、一般に軍事的な目的によるものとされている。水戸においても、寛永、正保期とその後の寛文期の城下町特に武家屋敷の拡張整備と、田町²⁷⁾の開設等の理由により、上町の内郭部分から多数の寺院が移転させられたといった事実が文献³⁰⁾に明らかである。したがって2-(1)で示したように、②のようなオープンスペースは一見民衆の精神的よりどころとなっていたと考えられる一方で、それは城下町周縁部に配置された町人地民衆の精神的総括というやはり軍事的な戦略の中に間接的に位置づけられるものであったと推測することができるだろう。

③については賑やかな繁華街の中心部に位置しており、互いにある程度の間隔を保って分布している。

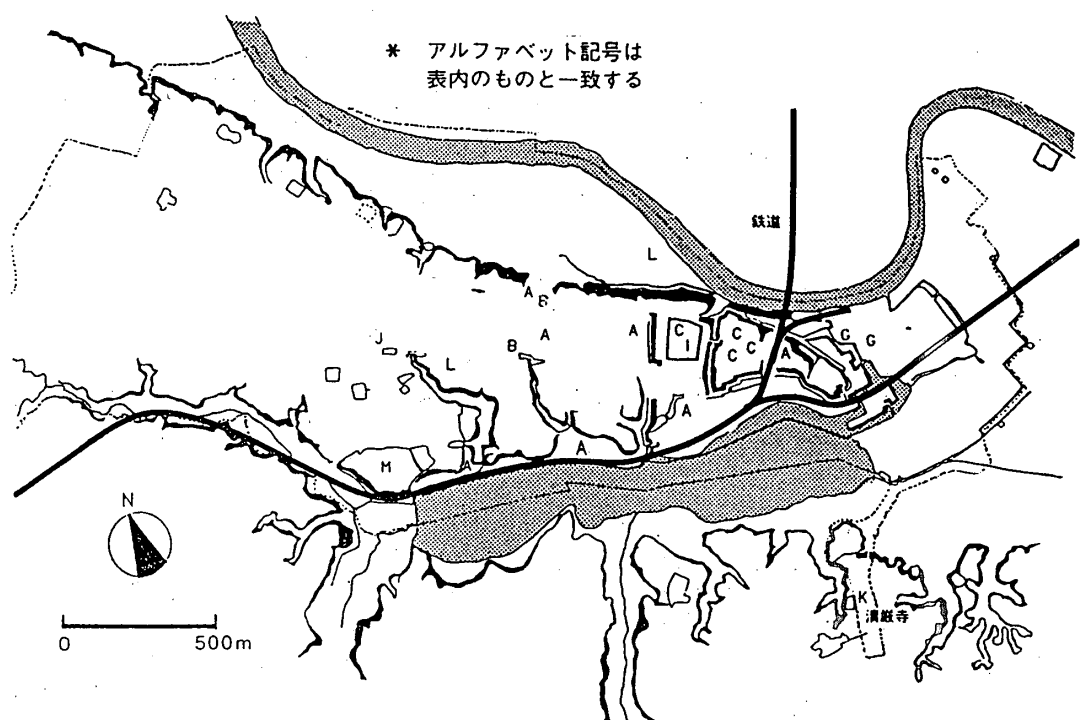
④は図には示していないが、台地下の那珂川沿岸部や千波湖沿岸の浸食谷の出口付近と桜川の流入部と下町の東側・南側というように、①②③によって構成されるオープンスペース・システム外縁部をさらに取り囲むようにして存在しており、都市部と田園地帯とが明らかに区分されていたことがわかるが、上述のように都市部にも小規模ながら畑地が分布していることからみて、都市部住民の食生活が周辺農村部だけで賄いきれなかったのではないかということが推察される。

⑤については、水戸城が今まで述べてきたオープンスペースを有機的に関連づけシステムを形成する中心部分に位置しているのに対して、偕楽園や花園は①のオープンスペース構造の周縁部に位置している。特に偕楽園については①と近接して選地が行われているが、これは軍事的な目的によるというよりも地形の変化がもたらす美観を考慮したものと考えられる。したがって、これらオープンスペースの設置は表面的には士族のレクリエーション的な目的のためになされたと考えるが、上記の配置の様子からみて軍事的・戦略的な存在機能を全く有していなかったとはいえないだろう。

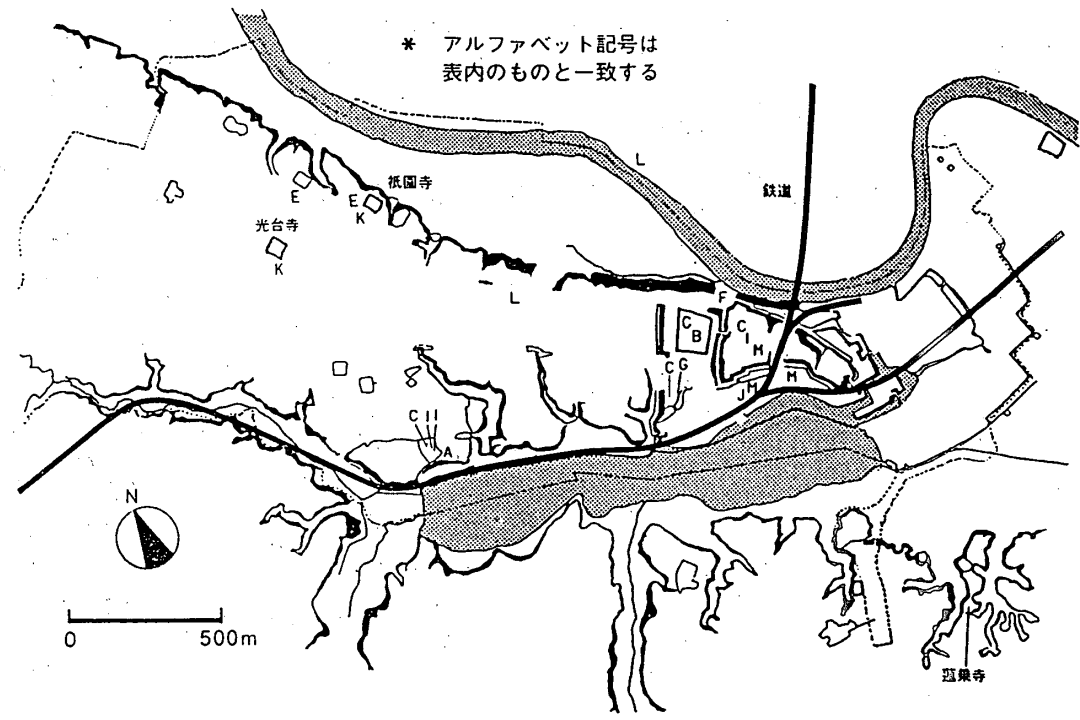
3. 明治期における変容とその要因



第2図 明治初期 (1868~1882) のオープンスペース分布



第3図 明治中期（1883～1897）のオープンスペース分布



第4図 明治後期（1898～1912）のオープンスペース分布

表 明治期「水戸」におけるオープンスペースの変容要因

			明治初期 元年(1868)～15年(1882)	明治中期 16年(1883)～30年(1897)	明治後期 31年(1898)～45年(1912)
(ア) 消滅・減少	インフラストラクチャー	(A) 交通		道路：堀 (19) 道路：堀 (19) 道路2本：堀 (20) 道路：堀 (20～) 鉄道：千波湖、堀 (22) 鉄道：堀 (23) 鉄道：千波湖、堀 (30)	道路：常盤神社前 (39)
	建蔽化	(B) 官公庁	県庁：弘道館跡 (5) 史館：弘道館敷地 (5) 病院：堀 (6) 新県庁：弘道館敷地 (15)	警察署：堀 (21) 測候所：堀 (30)	商業会議所：弘道館 (36)
		(C) 文教施設	史館：皆楽園 (5) 県勸業試験場：常盤公園 (9) 史館：皆楽園 (12)	学校：城跡 (21) 幼稚園：水戸公園 (26) 学校：城跡 (29) 学校：城跡 (30)	学校：弘道館 (33) 図書館：城跡 (36) 影考館新築：常盤神社 (42) 宝庫：東照宮 (45)
		(D) 神社仏閣	神社：皆楽園 (7)		
		(E) レク施設			遊園地：祇園寺 (41) 劇場計画：桂岸寺 (43)
		(F) 産業施設			発電所：堀 (39)
		(G) 市街地	町屋：堀 (6)	市街地造成：渡田沼 (16) 市街地：水戸城一帯の堀 (16) 市街地：堀 (20～)	市街地造成：東照宮 (41)
(イ) 機能転換	(H) 公有地		公園：皆楽園 (6) 公園：桜山 (6) 公園：弘道館跡 (8) 休憩所：五丁矢場 (9)		
	(I) 内部施設の機能転換		水戸城→藩庁 (3) 弘道館→県庁 (4) 水戸城→軍営 (5) 裁判所→県庁の一部 (5) 絞乳所→試験所・種畜飼養所 (13) 県勸業試験所廃止 (14)	弘道館→幼稚園 (22)	影考館廃止 (39) 影考館→図書館 (40) 城跡修景 (45)
(ウ) 新設	(J) 公共空地			広場：向井町 (19)	庭園：水戸駅前 (44)
	(K) 神社仏閣		光台寺再興 (12)	清巖寺再興 (17)	蓮乗寺再興 (35) 祇園寺再興 (41) 光台寺再興 (43)
(エ) その他	(L) レク施設		芝居劇場 (14) 水泳場 (9)	競馬場 (18) 芝居劇場 (21)	弓術練習所 (36) 遊泳場 (36)
	(M) 所有構造の変化		皆楽園収公 (2) 水戸城→陸軍省 (10)	常盤公園→水戸市 (25)	駅前旧藩敷→市有 (38) 水戸城跡→県有 (43) 旧水戸城藩敷→市有 (45)

※ 括弧内は明治の年数を示す

(1) 明治初期（元年～15年）

第2, 3, 4図はそれぞれ明治初期（元年～15年）、中期（16～30年）、後期（31～45年）におけるオープンスペース分布とその変容要因をプロットしたものである。そしてこれら変容の様子と詳しい変容要因さらにオープンスペースとの関連が強いと思われるレクリエーション施設の設置や所有権の変化等の付帯条件を年代ごとに概観したもの併せてまとめたものが表（明治期「水戸」におけるオープンスペースの変容要因）である。なお図2, 3, 4中の変容要因を示すアルファベット記号は表中のアルファベット記号に一致する。これらを見るとオープンスペース分布とその構造の変容の様子には、大きく分けて次の3タイプがあると思われる。

(ア) 既存のオープンスペースの消滅・減少

(イ) 既存のオープンスペースの機能転換

(ウ) オープンスペースの新設

(ア)については道路、鉄道といった諸施設を中心としたインフラストラクチャー整備と諸施設や住宅等による建ぺい化によるものとさらに分類される。(イ)については従来の形態・規模は存続するがその利用のされ方や管理運営のシステムに転換がみられたり、内部施設の機能が変化する場合である。(ウ)については従来オープンスペースが存在していなかったところにオープンスペースが新規設置される場合である。

さて第2図、表を見ると分かるように、明治初期においては第1図に示される江戸期のオープンスペース分布がほぼそのまま維持されている。そして明治維新に伴って新しく要求される諸施設は、場所を改め新設するのではなく、不用となった城跡を再利用したり既存施設の機能を転換したりすることによって対応している。明治初期は一般に旧物破壊の思想が強いとされ、特に城郭は旧藩士らによる反抗運動のより処になるとして積極的に破壊しようとする傾向さえ見られたのだが、水戸においては、ほかならぬ士族自身の手によって城の放火烧失という事件が起こされている。このことから、明治初期水戸においては近世の空間構造を比較的よく存続させていたが、これは急激な時代の変化のために新しいものをつくりだす余裕が当時の人々にはなかったことによるものと考えた方がよいと思われる。

また明治初期において特徴的なことは、「偕楽園」が桜川を挟んで隣接する「桜山」²⁰⁾と共に公園化され、「弘道館」²¹⁾跡地についても公園に指定されたことである。その他下市那珂川沿岸の「五丁矢場」²²⁾（封建時代の鉄砲場）が県の史跡の指定を受け、桜や柳が植えられると共に休憩所も整備されて、当時下市市民憩いの場として小学校の遠足にも利用されていたようである⁹⁾。したがって、ここにも封建時代の既存のストックの機能を

転換することにより新しい時代の要求に対応するというこの時代の基本的な状況がみられる。

このほか、社寺がさかに再興されており、偕楽園に設置された常磐神社の祭礼では、別雷皇大神宮²⁵⁾や二十三夜尊（桂岸寺）²⁶⁾の祭礼と共に水戸の三大祭礼として大変な賑わいを見せたようである¹⁰⁾。また、オープンスペースとはいえないが「常磐座」³⁰⁾（芝居劇場）といった公衆娯楽施設の新設がみられた¹¹⁾。

(2) 明治中期（16～30年）

明治中期は、第3図、表を見ると明らかなように、城下町という都市のイメージを決定づけていた①のオープンスペースの消滅、減少が顕著であり、所々でシステムの破綻を生じている。これらは主に大火災²⁸⁾後の市区改正によって市街地（道路・町屋）を建設したり、新交通システムとして鉄道と停車場を敷設するために堀や千波湖の一部を埋立てたことに起因する。また城跡には明治初期に軍営や官公庁が立地したのに対し、この時期には学校や幼稚園等の文教施設が盛んに立地しはじめており、維新の慌ただしさも峠を超え比較的安定期にはいったことがわかる。

ただここで注目すべきことは、城下町建設時に人工的につくられた堀に関しては消滅が激しかったものの、堀として機能していた天然の水系や崖地についてはほとんど破壊されなかったことである。これは城郭という近世の都市構造が明治期において存在意味を喪失したということに加え、人工物に比較して天然の地形のひだというものがいかに根深く改変され難いものであるかを物語るひとつの現象とはいえないだろうか。

そのほか、社寺の再興が引き続きみられ、火災の発生に対して広小路が新設されたり、競馬場²⁹⁾や「水府座」³⁰⁾（芝居劇場）といった娯楽施設が新設されている。

(3) 明治後期（31～45年）

明治後期においてはオープンスペース分布の大きな変容は起きなかったが、既存オープンスペース内における施設の立地があいかわらずみられた。城跡には引き続き学校、図書館等の文教施設の立地が確認され、偕楽園では常磐神社に続いて彰考館が移転新設された。このように城跡はいうまでもなく、公園に指定されている偕楽園でさえも新たな施設の立地により面積を確実に減少させていることがわかる。また社寺の再興が引き続きみられたが、その際寺域が整備され、例えば祇園寺境内に遊園地が誘致されたり³²⁾桂岸寺に大劇場新築計画が認可されたりした³³⁾。不用となった境内を単に宅地化するのではなく市民のレクリエーションの場として提供したことは注目に値する。

そしてこの時期、市による公園経営のための旧城跡の30年間無料拝借の願い出や県による水戸城跡の買収、東照宮官有林の払い下げ、旧水戸城濠敷の市への払い下げ、というように、城跡や堀といったオープンスペースの取り扱いや所有構造に大きな転換がみられた。またこれを受けて、市内道路整理事業計画、内堀埋立計画、駅前濠敷の埋立による市街開発等の明治以後のオープンスペース分布に大きな変容を生じさせることになる事業計画がこの時期決定されているのである。

4. まとめ

近世「水戸」城下町のオープンスペースは2-(2)で述べたように、①②③④⑤の5のタイプに大きく分類できる。なかでも自然水系や浸食崖といった天然のオープンスペースを基盤にして、城下町として機能するうえで足りない部分を人工的な堀、土累等のオープンスペースで補完してきたといったことに明らかなように、①のオープンスペースによる体系的な構造の存在は、近世城下町のオープンスペース分布の特徴といえることができる。また公共的なレクリエーション利用を目的として装置化されたオープンスペースは存在しなかったものの、神社境内や広小路、さらには軍事的機能を有していた自然水系（千波湖）までもが公共的な利用の対象となっており、レクリエーション、コミュニケーションの場として機能していたことがわかった。このように単一の空間や自然資源が多角的に機能していた点に当時の特徴をみることができる。

そして明治期に入り、城下町としての機能を果たす必要がなくなると役割を失った城郭関連オープンスペースは失われ始め、明確な構造を持つ体系的なオープンスペース分布に破綻が生じてきた。明治期のオープンスペースの変容の様子については3-(1)で述べたように（ア）（イ）（ウ）の3タイプに大きく分類できる。内容について概観すると明治初期には、封建時代のストックを生かしその機能を転換することで、公共的利用を最初から意図した新たなオープンスペースが既に生み出されている（偕楽園の公園化）。また近代化のために必要となる諸施設を、城跡での不用となった施設の機能を転換させることで代用していた初期に対し、明治中期では、諸施設の新築や市街地開発、インフラストラクチャーの建設等の積極的な開発が実施されオープンスペースは減少し、その構造にも大きな変化が生じた。しかし、それらは計画的な開発によるものではなく大火災等による偶発的なきっかけによるところが極めて大きい。明治後期はオープンスペース分布に関しては中期のまま推移したといえるが、大衆レクリエーション機能をもつ娯楽施設や社会

教育施設がオープンスペース内に盛んに新設された。このことはオープンスペースというものが公共的利用の対象としての機能を新たに獲得しつつある状況にあることを伺わせるものである。そしてこうした施設が盛況を呈した¹¹⁾ということからみて、民衆の間においても公共的な施設を利用するという態度が根付きつつあることが推察できる。

このように明治期はオープンスペースにおいてパブリックという概念が導入され始めた時期にあたるが、あきらかに未消化の状態であるうえに、新しいものをつくり出すというよりは近世のオープンスペース遺産を代用するという姿勢が強い。しかし、明治期特に後期はその後のオープンスペース分布の変容に多大な影響を与えることとなった計画がさかんに立案されていることから、近世城下町の基幹的構造を形成するというオープンスペースの存在意味が確実に変化し、官公庁、新交通システム、産業施設といった近代化に必要な諸施設立地のための単なる下地になりつつあることがわかる。

オープンスペースによる都市の基幹的構造の形成は、現行の緑地計画やオープンスペース計画の基礎的課題となっている。近世城下町は、軍事的目的により建設されたものであるとはいえ、その計画段階において、現代都市が目標としているように、オープンスペースによる都市の基幹的構造の形成という意志が働いていたと考えられるのである。

5. 補注・引用文献

- 1) このほかに、昭和4年「最新水戸市街図」（1/8,000，昭和前期日本都市地図集成）がある。
- 2) 水戸市役所（1968）：水戸市史中巻1,348-351。
- 3) 同上，622
- 4) 同上，623-624
- 5) 同上，634
- 6) 同上
- 7) 同上，352
- 8) 同上，464
- 9) 水戸市役所（1985）：改定水戸の町名—地理と歴史
- 10) 松永常二郎（1896）：水戸繁盛記
- 11) 武井邦夫編（1990）：水戸の近代100年，茨城新聞社
- 12) 水戸北部を逃れる河川，水戸城北側の堀として機能していた。
- 13) 上・下町の連絡の便をはかるために千波湖に設けられた。
- 14) 天保4年（1833），九代藩主徳川斉昭の作になる。
- 15) 千波湖西部に流入する河川。
- 16) 慶長15年（1610），関東群代伊奈備前守忠次により開

鑿された灌漑用水。

17) 千波湖北西岸の七面山を切り開いてつくられた。

日本三名園のひとつとされ、梅の名所。当時の面積は約14万7千平方メートル。天保13年(1842)開設。

18) 鎌倉時代初期、馬場資幹が館を築いたことにはじまり、常陸大掾氏、15世紀初期の江戸氏、佐竹氏と引き継がれたあと、佐竹氏を転封した徳川家によって25万石の城下町として始まる。

19) 下町の花畑の辻にあった水戸藩の花園、そのためこの地は「御花畑」とよばれた。

20) 桜川を挟み、偕楽園の南西に位置する丘陵。天保年間、緑岡の西に花樹を植えたことに由来する。

21) 天保12年(1841)、徳川斉昭の創建による水戸藩校。明治5年閉館。

22) 嘉永6年(1853)、徳川斉昭による西洋砲術の訓練場。

23) 元和3年(1617)、初代藩主頼房が家康をまつり創建した。毎年4月の祭礼は関東でも名高いほどの賑わいがあった。

24) 朝日山に位置する日本武尊をまつった神社。創建年代は不明。

25) 神亀元年(724)、京都賀茂神社より分霊。雷よけに効果があると信じられてきた。大工町の歓楽街をひかえ祭りは大変賑わった。

26) 真言宗で天和2年(1682)開基。谷中の歓楽街をひかり縁日には大変賑わった。

27) 那珂川と桜川・千波湖に挟まれた洪積台地上の水戸城を境として東部の沖積底地に寛永2年(1625)に開かれた田町が下町と呼ばれ、水戸城西部の洪積台地上に発展したのが上町。両者共に武家屋敷、町家があったが、実際には前者が町人地、後者が武家地として機能し双子

町的な性格を有していた。

28) 明治17年(1884)、1,200戸を焼いたのが下市大火。

1,800戸を焼いたのが上市大火。この二度の大火で封建時代の景観はほとんど失われ、特に上町では急速に近代化が進んだ。

29) 明治18年(1885)水戸公園の西部にできたが、明治26年(1893)廃止され梅が植えられた。

30) 常磐座。

31) 水府座。

32) 祇園寺。

33) 桂岸寺。

34) イギリス中世の荘園領主の狩猟園であるが、ここでは、狩猟はなされないが封建領主の居館であり政治を司る場として、また趣味等に興じる場として“Parc”をとらえた。

35) 水戸市役所(1968)：水戸市史中巻1,836

36) 同上、858-862

37) 同上、356

38) 同上、326

39) 堀口友一(1981)：今昔水戸の地名、晩印出版、70

6. 参考文献

1 水戸市(1991)：水戸市近現代年表

2 森山英一(1989)：明治維新・廃城一覧、新人物往来社

3 矢守一彦(1974)：都市図の歴史－日本編、講談社

4 大谷幸夫(1979)：空地の思想、北斗出版

5 吉村敏弘・瀬口哲夫(1990)：城下町都市における水辺空間の変容に関する研究、第25回都市計画学会学術研究論文集、403-408